

岡田和子句集「白桃」賞見

この度、岡田和子氏の句集「白桃」を拝誦した。

桃をイメージした優しく上品な色合いの表紙に、折柄の猛暑も忘れ續くと、句集名ともなつた一句が和子氏「自身の達意の筆により、白桃やかりそめならぬ今の幸と認められている。

本集は、ご主人岡田貞峰氏のあとがきにかえてによれば、ご病氣療養中の和子氏に代り、ご主人がご子息岳郎氏の「賛同・協力を得て編集されたもので、昭和二十八年から平成二十九年までの休詠期間を除いた凡そ五十年間の作品が「医師の恩」「白桃」「邯鄲」「春祭」「目借時」「晩菊」の六章に分け収められている。

著者略歴によれば、和子氏の「馬酔木」初投稿は、昭和二十八年に遡る。その後家事繁忙のため十五年間俳句を離れ昭和四十九年、投稿再開。四年後に「馬酔木新人賞」受賞。さらに二年後の五十五年、同人に昇格。平成二年、「馬酔木賞」を受賞された。長い「馬酔木」の歴史で「馬酔木賞」受賞者は五十九名、うちご夫婦での受賞は貞峰氏と和子氏に留まり、類ないことである。

和子氏は、ご主人とともに俳句の道は、「馬酔木」一筋に歩んで来られた。

恩師に係る作品を掲げる。

本原秋櫻子先生御逝去

逝きたまふ師や驚草は舞ひ終り

「白桃」

本原春郎先生御逝去

虫の音に師恩おもは湧くことし

「晩菊」

「新人賞」受賞作品を掲げる。

栗飯を待たれてをりて今日は炊く

「白桃」

香水やそれとなくきく子の外出

旅の子に残されしこと古茶いまる

離れゆく子ころ追はし茄子の花

白桃やかりそめならぬ今の幸

「香水や」と「旅の子」の二句は、馬酔木集(昭和五十三年八月号)巻頭に選ばれた作品、他は「草に咲く花にはあらずことばれ」、「菓子作る子に使はれて母の日を」の二句で、「香水や」の句についての秋櫻子の選後評を引く。

ごこの家の母親でも、必ず経験するような淡い心配を扱った句で、それが気持ちよく読む人の同感を誘うのは、表現に限なく心を配ってあるからである。た

とえば「香水」という季語を選んだこともその心くばりの現れだが、この場合は実にいろいろの季語を使うことが出来るわけで、とりわけ「香水」は最も使いやすいつであるが、またそれだけに、使いあやまる、到つて句が浮いてしまうおそれがある。中略。この句ではその注意がよく行き届いて「それとなくきく」という、誰にもわかる上に調子もさらりと耳立たぬ表現をしているから、ともすれば全体を軽く上滑りさせてしまいがち「香水」が、よく落ちついて、季語としての力を十分に發揮しているわけである。

秋櫻子は、このように述べた後、さらに、「平易でわかりやすく、しかも人の心に浸み入るような表現が立派」と評する。「白桃」の句は、徳田千鶴子主宰が序に代えてで触れられたように、秋櫻子の選後評に、「かりそめならぬ俳句」一時的ではないの意味で、家庭内の充ち足りた感しを、柔らかに描き出している」とある。

「馬酔木賞」受賞作品を掲げる。

うすうすと刻を染めゆく酔芙蓉

「邯鄲」

帯結やうしろ鏡や初しぐれ

行方持つ人の聲音や霜柱

純白にころをのせて餅を切る

初釜や金繡寂ひし帯の菊

何せむと来し寒厨に立ちつくす

蒟蒻に吸いつく刃先研返る

生れし子に必死の頃よ古雛

失ひし笛をころに納雛

聚る子に尽し終りの徹私や

夏足袋や華燭歩先慎みて

風鈴の音色はしまる子の新居

当作品は平成二年十一月五日、「馬酔木賞」選考委員会が原珂城・林翔・千代田萬彦・有働享・岡田貞峰・渡邊千枝子氏の各委員により開かれ、村上光子・吉田みち子・太田葵樹・黒坂紫陽子・山岸治子・斎藤道子・三嶋隆英氏の各作品とともに審査対象となり、三嶋氏とともに受賞に選ばれたもので、その選考経過を引く。

岡田和子氏 自分の言葉、自分の句境を持ち続け、着実に深めてきた。断然いい。たとえ貞峰氏(夫君)が異議を唱えたとしても無視して受賞とすること。(行方も)人の足音や霜柱、(何せむと来し寒厨に立ちつくす)、(失ひし笛をころに納雛)、(夏足袋や華燭歩先つちしみて) 以上のような次第で、今年に議論の

余地もなく二人受賞と決つた。予想通り貞峰氏は反対したが、春郎主宰のもと、亭主専横？は断固退けられ、初の夫婦馬酔木賞作家が誕生した。
この選考委員からも高く評価され見事な受賞であつたことを、如実に物語る選考経過である。また、自らも選考委員であつた「主人の立場と人柄を、ユーモラスな表現で伝えていることも印象深い。

本受賞に際しての和子氏の「感想」を引く。

（前略）本年度の作品を顧みましても、まだまだ力が足りないことを自覚しています。日常の生活の繰返しの作品が、過去の作品を乗り越えることが本当に難しいことを此頃つくつく感じています。この受賞を機会に生活に対する新しい心構えを新たにしたいと思っています。（後略）

控え目にも述べられた決意通り、作者はその後も弛まぬ精進を続けられ、馬酔木賞作家としてふさわしい業績を挙げられた。

本集は身内に係る作品が目立つ。多い順に挙げれば子に係る作品四十六句、母に係る作品二十一句、夫に係る作品十一句、父に係る作品四句、姉に係る作品四句、兄に係る作品三句、孫に係る作品二句である。以下、順に主な作品を掲げる。

子に係る作品

日焼子に夢を強ひてかなしきよ

〔白桃〕

子がすすむ夫との旅や夜の秋

松の枝男の子は父に惹かれゆく

受験子の今朝すこやかな爪の色

かくさる男の子の恋や巴里祭

とある日は子ある憂ひに惹刻む

嫁ぐ日の哀歎ゆらぐ冬椿

二人子の婚儀重ねし去年今年

耳もとに身籠ると子や春夕べ

父となりし子の肩高し夏椿

虹三重子は父となり母となる

夏瘦せを別れしあとの子に思ふ

子を詠んだ作品が多いことは、作者が母親であることから当然のことと言えようが、さらに作者の場合は、身はとりを慎ましく詠む句風からして、子を題材とした作品が多くを占めたものと考へる。これらの作品をつまみに見てゆくと、子の成長とともに作者の子に対する思いや気持ちの微妙な変化が、手に取るように見

て取れる。それというのも、巧まずして自然体でものを詠む作者本来の句風によるためであらう。

母に係る作品

寝遅れて母に湯婆あつらるる

晴着買ふ値踏み母の陰にゐて

訪はすめて膝掛厚く母に編む

病む母のひと箸に増く蕪茶し

加賀梅の真白なる夜を母逝けり

路ゆてつ母のさびしさ今思ふ

母恋は薄日やくらみ貝母咲く

彼岸会の心経誦せば母のこゑ

母の律儀われに終らむ盆供養

母の日や我にまさりし母の労

何れの句にも、母親に対する深い感謝の思いが籠もる。

夫に係る作品

わが客に夫の昼寝を絶たれける

夫と出て遅月をあふぐ客の後

夫留守の夕餉まつしき一葉忌

身丈しのぐ子を率て夫の登山帽

夫ありて世の波あはし鳳仙花

十六夜や父のかたち夫がをり

かき餅や時折見する夫の老

夫の背を通夜送りし枇杷の花

病む夫の真顔に遇り星の虫

晩菊や起居一人の塵すこし

再び、徳田主宰の序に代えてより引く。

（前略）私は和子氏とゆつくりお話しをしたことではないのですが、岡田家にお電話した折、取り次がれる和子氏の「お父さん」と呼ばれる声のしっとりした佇まい。お互いを思いやる心が伝わります。（後略）

かくも、作者の「主人に対する篤い信頼と思いやりの心に満ちた作品は、読む者をして和やかな気持ちになせられる。

父に係る作品

〔医師の恩〕

〔白桃〕

〔邯鄲〕

〔春祭〕

〔目借時〕

〔晩菊〕

〔医師の恩〕

〔邯鄲〕

〔春祭〕

〔目借時〕

〔晩菊〕

舊散るや夫旅の夜の父やさし

「医師の恩」

爛熱く亡き父の友もてなせり

「白桃」

迎火に父母とおぼしき風通る

「邯鄲」

父の植ゑし方に今も実南天

「目借時」

第二章に「亡き父」の句があることからして、父上は昭和五十七年までに逝かれたのであろう。「迎火に」父の植ゑし「の句、いつまで経っても父上のことを懐しく思い出される作者である。

姉に係る作品

襟白く嫁がぬ姉や寒弾す

「医師の恩」

声徹る浴衣さらひの喜寿の姉

「春祭」

風花の舞々今生に姉は亡き

「目借時」

姉逝く

病み果ての面輪小さし青葉冷

「晚菊」

姉上「逝去にともなう作品を第六章に見る。作者の寂しさも一入のことと察せられる。

兄に係る作品

槐黄はみ兄戦没の地はいづこ

「邯鄲」

兄の忌に姉妹欠けずよ柏餅

「春祭」

黄砂降る兄戦没の地の色

「目借時」

兄上は先の大戦で亡くなられたのであろう。「黄砂降る」と詠まれたことは、中国大陸で戦死されたと見るのは間違いないだろうか。

孫に係る作品

鯉幟孫のひと年飛ぶやうに

「春祭」

色鉛筆虹を見て来し孫に買ふ

誰しも孫の可愛さというものは尋常でない。作者のお孫さんへの思いを、「鯉幟と虹」の季語がしかと代弁する。

作者は登山家としても「活躍のご主人ともども、山行を楽しんで来られた。山に係る作品を掲げる。

奥多摩御岳

邯鄲をきく爪先に身を乗せし

「邯鄲」

富士スバライン

雲海や富士五合目にゐる不思議

「春祭」

霧峰二句

草尾根と雲とのあはひ黄骨満つ

湿原の雲自在なり風露草

霧峰二句

牧かけて霧なだれゆく柳蘭

「目借時」

松虫草湖より淡く揺れ交はす

乗鞍岳一句

防風衣ひき締めて待つ御来光

「晚菊」

山の湯の二槽あふる星月夜

山荘に千石の音沈む夜の秋

山に詳しい「主人の案内で、さぞかしやどの山行においても存分に山の景と自然を堪能されたに違いない。「乗鞍岳」の二句は、最終章に見ることからして、米寿前後の作品であらう。かくも「高齡にして、なお三千級級の高山で御来光を仰がれる」とは、大きな勇氣と励ましを授かるのは、一人私だけではないであらう。

以上、本集の主な作品を掲げ鑑賞させて頂いたが、何れの句にも作者の奥ゆかしさ、優しさ、暖かさが滲み、思わず知らず安らかな気持ちにさせられる。それも偏に、作者が決して意を飾らず真の心で、自身の人生、就中に日常生活の濃やかな感動を詠み続けて来られたからに他ならない。

和子氏は、妻として母親としてその責務を十二分に果たされた上に、五十年余を文字通りおしどり夫婦として共に俳句の道をも歩んで来られた。ご主人になるあとがきにかえてより引く。

私は妻の命の証しともいえるこの句集を編み、深い感謝をこめて妻に捧げたいと思う。

このようにして結ばれた本句集は、和子氏に対する「ご主人とお子さんからの掛替えない贈り物なのではなかつたか。

最後に、第二章に「婚約成りて」と前書のある作品の次に置かれた一句と本集の掉尾を飾る一句をあわせて掲げる。

朝の薔薇主婦として立つ「厨」

寒椿心にとどめ籠りゐる

令和六年七月 梅雨晴間の日に

今田 清二